

バードリサーチ

鳥類学大会 2024

JBRA

Ornithological Conference 2024

講演要旨集

目次

1. はじめに	p02
2. 大会概要	p03
3. 参加方法説明	p05
4. スケジュール	p09
5. ポスター発表要旨	p10
6. 広告	p24

1. はじめに

バードリサーチは、全国の会員と共に鳥類の生息状況などのモニタリングを行うと共に、鳥類学の発展のために、様々な活動を行っています。

新しい方法で鳥の世界を見せてくれる研究や鳥の保全に関係する研究には多くの方が心を動かされます。また、マイフィールドでの地道な記録の積み重ねや、そこから得られるインスピレーションもとても大事です。

そこで、バードリサーチでは、鳥類の調査や研究成果について、オンラインで学会形式の発表や交流の場を設けることにいたしました。いろいろな立場で研究をする人、調査研究に興味をもつ人、研究成果から学びたい人など多様な人が鳥の調査や研究について、気軽に見聞きしたり議論したり、仲間を増やしたりできる場を提供します。

大会名称：バードリサーチ鳥類学大会 2024

大会英語名称：JBRA Ornithological Conference 2024

会期：2024年12月21日（土）、22日（日）

主催：特定非営利活動法人バードリサーチ

協賛：一般社団法人ヒマラボ

広告掲載協賛企業：ティアック株式会社

大会運営：バードリサーチ



本大会は一般社団法人ヒマラボより協賛をいただいています。

一般社団法人ヒマラボは「市民の探究心や研究的な姿勢を涵養し、好奇心の毀損されない、市民自ら新たな知を生み出す「創造社会」の実現」を目的に掲げており、本大会の取り組みがその目的と合致していることから協賛いただきました。

2. 大会概要

ポスター発表 [oVice]

ポスターはPDFで作成してください。PowerPointやKeynote、Canva、googleスライドなどを使って横長スライド6~10枚程度にまとめ、PDF化したものを準備してください。スライドは縦に並んで聴講者に表示されます。対面開催の学会発表用などにA0サイズで作成したポスターがある方は、それをPDFにしたものでもOKです。ファイルサイズはあまり大きくならないよう調整をお願いします。10MB以下が理想です。

会場にはoViceというバーチャルオフィスサービスを利用します。oVice上で質疑ができるコアタイムは各2時間半です。現地開催のポスター発表に近い雰囲気を感じてください。

バードリサーチ活動報告 [YouTube]

バードリサーチから1年間の活動報告をします。(Zoomの画面共有を使って発表) 聴講はYouTubeを使用し、質疑はYouTubeのコメント欄を使用します。

バードリサーチの活動報告とこれから

高木憲太郎

シロチドリと生息地を守る活動、これまでの取り組み

守屋年史・野村佳那子

フィールドノートに登録されたさえざり記録の季節変化

植村慎吾

鳥鳴けば春風ぞ吹く 秋の夜長に思ひ高鳴る

姜 雅瑠

調査研究支援プロジェクト 2024年度調査研究プラン紹介 [YouTube]

今年度、調査研究支援プロジェクトの支援対象となった調査研究プランを紹介します。支援先の研究者の方に登壇いただき、プレゼンテーションをしていただきます。聴講はYouTubeを使用します。

懇親会 [Zoom]

最初の30分はランダムに割り振られたZoomのブレイクアウトルームで、自己紹介を交えながらご歓談ください。その後は、自由にルームを移動して話したい人と交流を深めてください。

バードリサーチ賞 授賞式・受賞講演 [YouTube]

バードリサーチ調査研究支援プロジェクトは、鳥類についての調査研究プランを調査の実施前に作成し、提出してもらいます。そのプランに対して皆様からの寄付を募り、集まった寄付をもとに調査や研究を実施する方に支援金を贈呈しています。

調査や研究を実施した後に、ご報告いただいた成果報告書の内容に基づいて、3年に1度選考を行ない、研究や活動の独創性、達成度、発展性、などを基準に優秀な成果をあげたものをバードリサーチ賞として表彰しています。4回目のバードリサーチ賞を受賞したのは、次の3件の調査研究プランです。授賞式と受賞講演の聴講はYouTubeを使用し、質疑はYouTubeのコメント欄を使用します。

メジロは何をしゃべっているのか？－メジロの音声言語と混群構成種との関係－

近藤 雅也

北海道のアカモズがすみやすい環境は？－アカモズの保全に配慮した森林管理の提案へ－

北沢 宗大・市川 伸・青木 大輔・先崎 理之

新しい渡り鳥調査手法－夜に渡る鳥の識別とカウント－（2021年度）

新発見の連続－夜に渡る鳥のカウント－（2022年度）

原 星一

表彰 [YouTube]

今大会ではポスター発表について以下の2つの賞を設けます。いずれの賞も、参加者全員による投票によって決定します。ポスターをヒマラボ賞の対象とするかは、自己申告によります。

1) 最優秀ポスター賞 (JBRAOC2024 Poster session Golden Bird Award)

2) ヒマラボ賞 (JBRAOC2024 Poster session Himalab Award)

3. 参加方法説明

バードリサーチ活動報告・バードリサーチ賞受賞講演の見方・質問の仕方

報告や講演は、限定公開ページにライブ配信される動画を視聴していただきます。

質問は YouTube のコメント欄=チャット欄を使用します。ここに記入された質問を、質問対応スタッフがピックアップして、講演者に口頭で質問を伝えます。YouTube に配信される映像は実際よりも数十秒のタイムラグがありますので、質問は早めに記入していただくようお願いします。

コメントを書き込むために YouTube (Google) のアカウントが必要です。大会参加前にアカウントを取得しておいてください。アカウントは複数持つことができるので、普段使っているアカウントを使用したくない場合は、別アカウントを取得しておいてください。



質問の記入には、Google アカウント=Gmail アドレスが必要です。

詳しくはバードリサーチ作成の Zoom 利用マニュアル

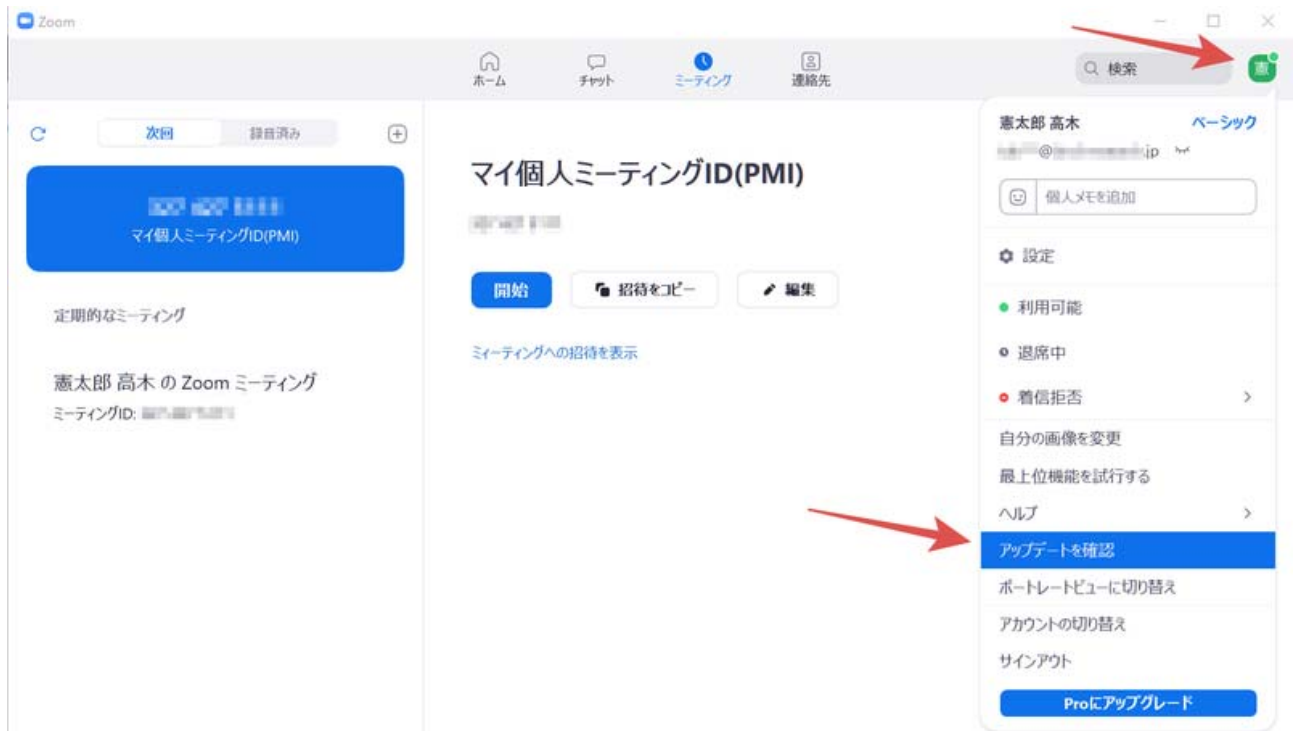
https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2022/Zooming-manual2022_byBR.pdf

の 15 ページ以降に YouTube (Google) のアカウントの取得方法などの説明があります。

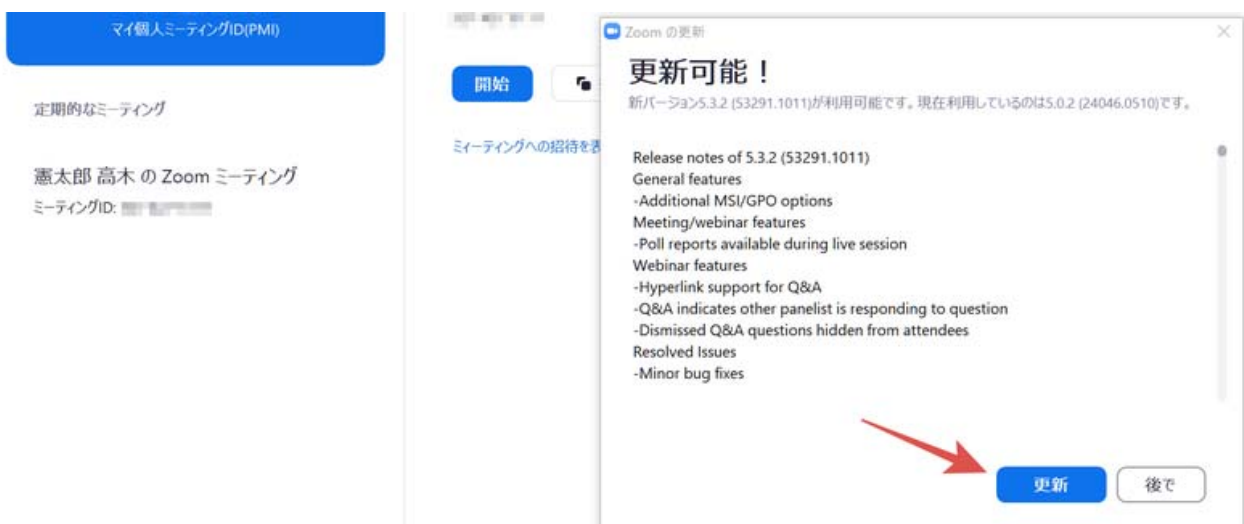
こちらを参照してください。Zoom のバージョンアップにより、画面表示は最新のものと若干異なります。

Zoom のアップデート確認方法

Zoom の安全性については、2020 年春の段階で、たくさん指摘されていました。しかし、その後のバージョンアップで改善が図られたようです。セキュリティの向上のため、参加される際は、最新版にアップデートをお願いします。



アップデートの確認は、アプリを起動して画面右上のアカウントアイコンをクリック！そして、プルダウンメニューから「アップデートの確認」をクリックしてください。



しばらく待って、「更新可能！」のウィンドが開いたら、青い「更新」ボタンをクリック！これで最新版にアップデートされます。

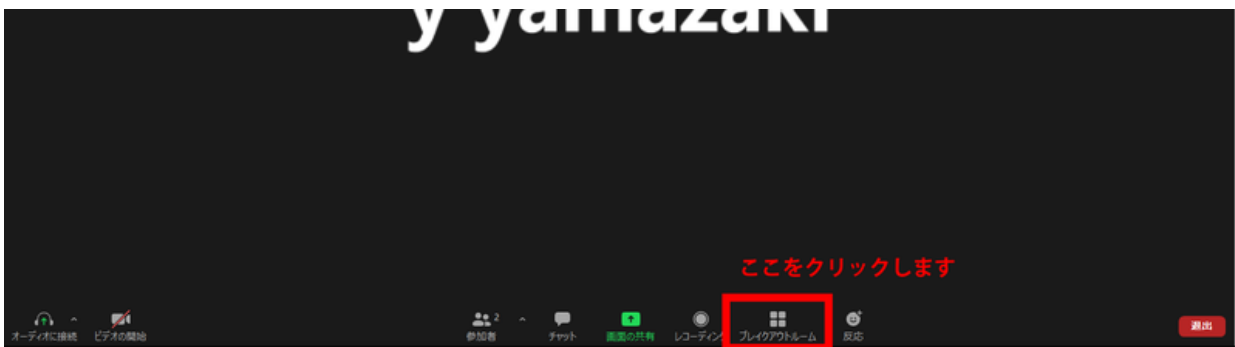
詳しい Zoom の利用方法は下記バードリサーチの Zoom 利用マニュアルをご覧ください。

https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2022/Zooming-manual2022_byBR.pdf

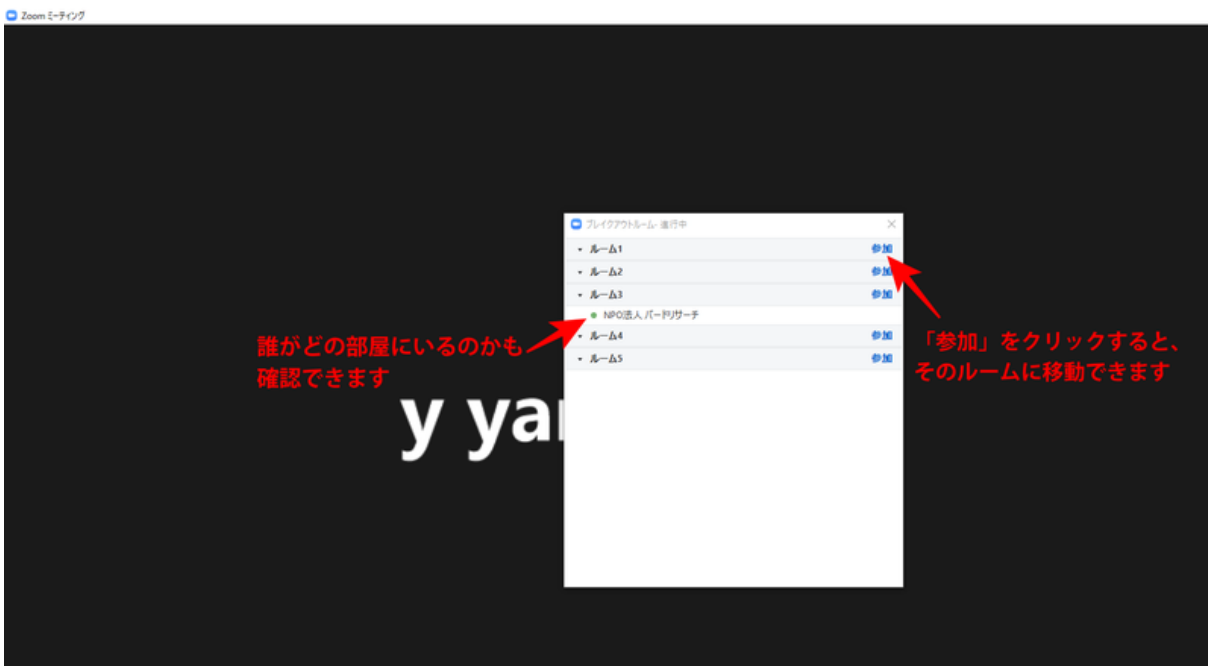
Zoom ブレイクアウトルームの利用方法

自由集会と懇親会では、複数のルームを Zoom 上に作ります（ブレイクアウトルームという Zoom の機能です）。Zoom の画面の下に「ブレイクアウトルーム」というアイコンがあるので、これをクリックしてください。設定されているルームのリストが表示されるので、好きなルームを選んで移動できます。

※正常にブレイクアウトルームを使用するためには、Zoom アプリのバージョンは 5.3.2 以上が必要です。



Zoom 画面にカーソルを移動させて、画面下メニューを表示させます。「ブレイクアウトルーム」をクリックします。



ポップアップウィンドが開くので、リストの中から好きなルームを選んで「参加」をクリックしてください。※上記の画面は Windows です。iPad などではメニューの表示方法が異なります。

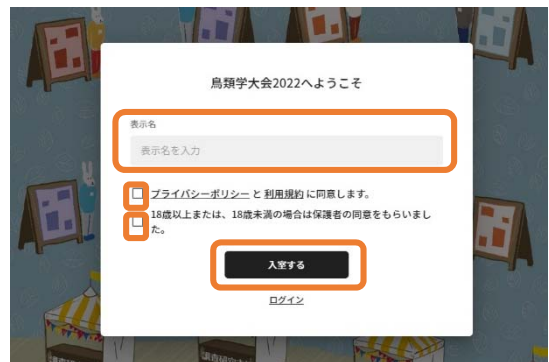
ポスター発表の見かた（入室について）

ポスター発表の質疑は、oViceという平面のバーチャル空間上で行います。oViceのアカウントを登録しなくても、表示名の入力だけで参加が可能です。空間内の移動や、ポスターの表示・非表示、会話の成立には、少しコツがあり、慣れが必要です。

1920×6400ピクセルの縦長のスペースにポスター番号と発表者名が掲示され、アバターと呼ぶ自身のアイコンを近づけるとポスターが開きます。質疑はアバターを近づけて音声で行います。

推奨環境はPCとなっていますが、スマートフォンでも利用可能です。PCの場合のウェブブラウザはWindows、Macとも、**Chrome**の利用が推奨されていますが、**Edge**でも利用可能です。Macについては、**Safari**で利用可能です。**最新版では、デスクトップアプリがリリースされており、アプリを利用いただくと音声等をスムーズに利用できます。**ブラウザでアクセスするとインストールへ誘導されますのでご利用下さい。

メール等でバードリサーチから通知されたoVice会場のURLリンクをクリックしてください。ウェブブラウザが起動し、右の画面が開きます。アカウントを取得（oViceの会員登録）は必要ありません。ご自身の「名前 所属」を簡潔に記入して、確認のチェックを入れて「入室する」ボタンをクリックしてください。



入室の際に**パスワード**が必要です。参加者には、メールでパスワードをお知らせします。

入室すると、画面上部のブラウザ側で、ポップアップが開きますので、マイクの使用を許可してください。カメラは基本使わないのでブロックしても構いません。

入室するとブラウザの画面内左上に入力した名前が入ったアイコンがあります。

これがあなたの位置を示している「アバター」と呼ばれるものです。

ポスター会場では、このアバターを移動させて、他の参加者と会話をしたり、ポスターを見たりします。アバターを移動させる方法は3通りあります。

- ・移動したい場所をダブルクリック
- ・自分のアバターをドラッグする
- ・PCキーボードの矢印キーを押す

画面の右側を表示するためには、ウィンド下部のスライダーをドラッグしてください。

画面の上下の移動には、マウスのローラーを転がしてください。

入室後の操作について詳しくはバードリサーチ作成のoVice利用マニュアル

https://www.bird-research.jp/1_event/jbraoc2023/jbraoc_oViceManual.pdf

を参照してください。

4. スケジュール

21日	22日
○ 13:30 開会	Y 10:00 調査研究支援プロジェクト バードリサーチ賞 授賞式・受賞講演①②
○ 13:45 ポスター発表 コアタイム①	● 12:00 昼休み
Y 16:15 バードリサーチ 活動報告	Y 13:00 調査研究支援プロジェクト バードリサーチ賞 受賞講演③
Y 17:30 調査研究支援プロジェクト 2024年度調査研究プラン紹介	○ 14:00 ポスター発表 コアタイム②
Z 18:00 懇親会	● 16:30 小休憩
	○ 16:40 ポスター賞 ヒマラボ賞 表彰式
	○ 17:00 閉会

↑ 時間の左のアルファベットは使用する会場を表しています

○ oVice会場
Y YouTube会場
Z zoom会場

5. ポスター発表要旨

<ポスター発表>

ポスター発表 P-01*

移動時間で調べた栃木県のサシバ分布とその行動

○鈴木由清(鹿沼自然観察会)、境野圭吾(栃木県レッドデータブック)

サシバ *Butastur indicus* は環境省レッドリスト 2020 で絶滅危惧 II 類 (VU) に掲載されており、北海道を除く 46 都府県のレッドリストでも絶滅危惧種に指定されている。栃木県では県全域で分布が確認されているものの、市貝町を除き多くの自治体で分布情報は散在的である。そこで現状における栃木県のサシバ分布を把握するため、2020~2024 年に通勤や移動時間を活用し、目視観察および鳴き声記録を基に分布調査を実施した。その結果、計 395 地点で生息が確認され、県内 25 市町のうち 19 市町で分布が確認された。特に南東部と南西部で多くの記録が得られた。本発表では、本調査で確認された分布記録と繁殖期の生態的知見を紹介し、栃木県内のサシバの現在について考えていく。

ポスター発表 P-02

水沢の森に生息するガビチョウの生態調査

○北島凜花 (東京都市大学環境学部環境創生学科)、西田澄子 (東京都市大学大学院環境情報学研究科)、北村亘 (東京都市大学環境学部環境創生学科)

特定外来生物ガビチョウの生態および在来鳥類との関係について、川崎市宮前区の水沢の森において調査を行った。ラインセンサス法を用い、調査地に生息する鳥の出現地点を調べた。また、ガビチョウとウグイスの林縁からの距離を分析した結果、ガビチョウの平均距離は 7.41m、ウグイスは 11.27m で有意差が見られた (p 値=0.032)。この結果から、ガビチョウとウグイスが異なるニッチを利用している可能性があり、生息環境の分化や競争回避のメカニズムについてのさらなる研究が必要である。

ポスター発表 P-03*

希少鳥類の保全上の新たな課題~シカ等の増加による低層湿原の衰退の可能性~

○多田英行 (日本野鳥の会・岡山)

岡山県内にある錦海塩田跡地には、チュウヒやオオセッカなどの希少な鳥類が生息している。これらの希少鳥類が生息するためには、ヨシ・スゲ群落などの良質な植生環境が必要となる。しか

し、近年、国内ではシカやイノシシなどの大型哺乳類の分布拡大や個体数増加が見られており、丘陵地に隣接した当地でも大型哺乳類の目撃頻度が増加している。このような大型哺乳類の増加と同時期に、当地では湿地内のヨシ・スゲ群落の衰退（下層植生の消失、草丈の低下、生育密度の低下や裸地化）や、希少鳥類の生息状況の悪化が観察されていることから、本発表では湿地性希少鳥類の保全上の新たな課題を事例紹介する。

ポスター発表 P-04

市街地のツミの繁殖行動 Part 2

○緒方晴

野鳥観察を始めたばかりの頃にツミを見て、「近所の公園にもこんな猛禽類がいるのか」と興味を持ち、市街地で繁殖するツミの番の子育てを、2021～2024年に観察してきた。去年は、営巣場所を変える際に、前回の場所から500mほどの距離にあるアカマツを選んでいたことを報告した。今年の子育てでも、同じような行動をとるのか調査した。去年の営巣場所で1回目は巣作りに失敗し、営巣場所を移動した。2回目の営巣場所は、やはり500m圏内のアカマツで、2羽の雛がえったが、途中巣が落ちるといふ大変な出来事が起きた。その後、雛が1羽枝に掴まって生き延び、無事巣立つことができた。

ポスター発表 P-05*

カラス類の死因解明と行動について～クラウドファンディングの中間報告も兼ねて～

○中村眞樹子（NPO 法人札幌カラス研究会）

野鳥の大量死はしばしば発生するが、鳥インフルエンザが陰性だとそれ以降の死因解明はされていない。2020年から2024年の間に札幌市街地で発見されたカラス類の死骸について死因解明を行っていて、159例中36例が出血性壊死性腸炎と診断された。今回は死亡要因の多くを占めている、出血性壊死性腸炎（*Clostridium perfringens*）を中心に感染経路などをカラスの行動から推察する。2015年ころをさかいにポックスウイルス感染症（Avi Pox）による死亡及び数弱個体の発生はほとんど見られていない。また近年札幌市内で猛威を振っている。カラスの生息数も減少している。高病原性鳥インフルエンザも含めて、カラス類の死因解明を明らかにしておくこと今後の対応に役立つと思われる。

ポスター発表 P-06

川に架かる電線上にできたコサギの集団壻

○橋本啓史（名城大・農）

2024年9月4日に愛知県名古屋市天白区の天白川に架かる電線上にコサギの集団壻を発見し、時々観察した。大通りの橋近くであるが、照明はコサギを照らしてはいなかった。16羽～26羽前

後のコサギのみが埒として使用し、11月3日までは電線上で観察できたが、11月8日には観察できず、翌日にやや下流の河川堤防上の樹林に埒が形成されていることがわかった。季節的に寒くなったので移動したのかもしれない。その後の観察で、河川堤防上の樹林に埒に集まるコサギの個体数は60羽前後まで増えた。また、就時前集合のような行動も観察された。

ポスター発表 P-07*

日本国内における夜間フライトコール (NFC) の自動検出

○加藤義清 (バードリサーチ会員)、大坂英樹 (トリルラボ)

渡り鳥には夜間にフライトコール (NFC) という鳴き声を発しながら飛ぶ種がいることが知られている。我々は、市民科学プロジェクトとして、渡りの状況を明らかにするために、春と秋の渡りのシーズンに日本各地の協力者との連携のもと、録音調査を実施している。録音調査では膨大な録音データの分析に要する時間や労力が問題となる。本発表では、2024年春の調査データに NFC の自動検出手法を適用し、その性能を検証した。その結果、総録音時間の 1% 以下の音声を確認するだけで 90% 以上の NFC を正しく検出できることが確認できた。また、今回の分析結果から、録音調査により NFC の季節変動が捉えられる可能性が示唆された。

ポスター発表 P-08

将来起こりうる野鳥とドローンの関係性について

○渡辺侑里香 (東海大学)、田中真 (東海大学)

スペースデブリの研究のため、ドローンを成層圏より高く飛ばす案から、地上と成層圏を頻繁に往復するためドローンと野鳥が衝突するのではないかと考え、ドローンと野鳥の関係性について研究をする。研究方法は動画サイトの記録や Web サイト上の文献、本や雑誌の情報を研究データとして用いた。この研究から、バードストライク等の 4 パターンに考慮した結果野鳥にとって大きなダメージとなる。また、バードアタックが起こりやすい時期とは、繁殖期の時期が多くなると予想する。なので、ドローンと野鳥の関係性とは、野鳥に対する保全活動や規制を行うことや、ドローンを操縦する場合は各種申請や資格の有無、野鳥についての知識が必要と考えた。

ポスター発表 P-09*

ブッポウソウの亜種 *Eurystomus orientalis pacificus* の国内初記録と過去の記録について

○熊谷隼 (北大・院・理 (現 EnVision 環境保全事務所))

沖縄県南大東島で2020年6月に観察されたブッポウソウの亜種 *Eurystomus orientalis pacificus* について報告する。また、1938年にパラオで採取され、ミナミブッポウソウの和名で報告されている本亜種の標本についても考察する。日本鳥類目録改訂第8版(2024)において亜種 *E. o.pacificus* は掲載されておらず、本記録は日本国内における本亜種の初記録であると思われる。本亜種は主にオーストラリアやニューギニア等の南半球-赤道地域に分布するが、本記録と同様に、赤道から離れた北半球に位置するマリアナ諸島においても観察記録があり、今後も偶発的な渡来が記録される可能性がある。

ポスター発表 P-10

ヒナを拾わないで！拾われたヒナのその後～傷病鳥獣救護施設における実績からの報告～

○佐藤悠子（新潟県愛鳥センター紫雲寺さえずりの里）

ヒナを拾ってはいけないことが浸透しつつあるものの、救護施設に預ければ大丈夫と思われていることも多い。新潟県ではヒナを保護収容の対象外としており、問い合わせを受けた際にはヒナを親元に返すためのアドバイスを行っているが、毎年引き取らざるを得ないケースがある。そういったヒナがどのような結末を迎えたのかについて公表されている資料はこれまでにほとんどない。愛鳥センターにおける2008年～2022年の収容データから、ヒナに関連する収容事例について分析した。巣立ち前の日齢では7割程、巣立ち後の日齢でも5割程が死亡していた。放鳥できたケースでも、放鳥後間もなく捕食された事例や、餌が採れずに死亡した事例があった。

ポスター発表 P-11*

GPS と音声からカラスバトの行動を探る

○市石博、佐渡志穂里、幸松浩然、大津洸太郎、丸山雅人、山崎樹玲、渡辺葉月、徳原ゆり

天然記念物の鳥カラスバトは希少種であると同時に極度に人を恐れる性質ゆえ、その生態が未解明なことが多い。そのような鳥の生態を調べようと国分寺高校生物班では伊豆諸島に通いながら音声とその時のカラスバトの行動からその鳴き声の意味を探る試みをしてきた。また、国立環境研究所の安藤温子博士との共同研究でGPS装置からの情報からこの鳥の日周行動や移動についても解明しようとしている。その成果を今回発表する。

ポスター発表 P-12

イクメンなジョウビタキは3回も繁殖

○山路公紀、浦田そら

繁殖にかかるエネルギーは大きいため、多くの鳥は年に1回しか繁殖しない。ジョウビタキは、元々の繁殖地である中国やロシアで、年に1-2回繁殖するとされている。八ヶ岳周辺で15年間

の繁殖を調べた結果、限られた繁殖期のなかで3回繁殖したペアの数は全体の8%であった。巣立ち日の分布を調べた結果、3回の巣立ち日の中央値の差が42日および34日であった。営巣開始から巣立ちまでにおよそ38日を要することから、造巢、産卵、抱卵期間の一部が、前回の巣内外の育雛期間と重なっていた。また、営巣場所の多くは同じ建物の異なる場所か近隣にあった。これらは、特にオスの働きによる繁殖期間短縮のための工夫と考えられる。

ポスター発表 P-13

アオシギの生息している川底を探ってみました! (茨城県におけるアオシギの生息環境と生態)

○岸久司

茨城県内の沢を歩き始めて約20年が経過しました。今までの観察から解ってきたこと、いまだ解らないことをまとめて見ました。特に沢の自然環境や捕食していると思われる沢底の水生昆虫などについて注力してみました。ガガンボやトビゲラ、カゲロウ類の幼虫を捕食していることが解ってきました。本大会を機に本種に関心をもたれて、将来にわたっての環境保全や種の保護の一助になればうれしく思います。ページの最後に「隠れているアオシギを探せ!」のコーナーがありますので是非チャレンジしてみてくださいと思います。

水鳥通信 2019年12月号「アオシギは里山の身近な冬鳥です」ではお世話になりました。今回はそれ以降の観察を含めて再編集してみました。

http://www.birdresearch.sakura.ne.jp/1_publication/Waterbirds_newsletter/waterbird_news21_201912.pdf

ポスター発表 P-14

データロガーによる追跡で明らかになったアオシギの日周行動について

○細谷淳（鳥類標識協会）、田谷昌仁（鳥類標識協会、東北大学）、竹田山原楽（鳥類標識協会、東北大学）

アオシギは主に山間部の溪流に生息し、水田のような開けた環境への出現は稀とされていた。しかし、2021～2023年の発表者らの調査で越冬期の夜間、水田に頻繁に出現することが判明した。これを詳しく調べるため、5羽にGNSSロガーを装着、放鳥した。平均50.4日間追跡をし、5羽合計934地点の位置情報を取得した。追跡データから昼間は山間部の河川（溪流や川幅25mの河川）や林内の湿地で過ごし、夜間は水田などの農地に移動する習性が確認された。昼夜の生息地は982～3,298m離れており、特に夜間の利用場所には強い固執性が見られた。

ポスター発表 P-15*

ネコのもつ病原体が希少鳥類に感染 – 奄美大島における野生鳥類のトキソプラズマ感染状況 –

○鈴木遼太郎（日本獣医生命科学大学・院・病態病理）、吉村久志（同大・獣医保健看護・病態病理）、常盤俊大（同大・獣医・獣医寄生虫）、伊藤圭子（奄美いんまや動物病院）、鳥本亮太（ゆいの島どうぶつ病院）、新屋惣（奄美野生動物医学センター）、山本昌美（同大・獣医保健看護・病態病理）

奄美大島で野生化したネコは、強い捕食圧に加え、トキソプラズマ（*Toxoplasma gondii*、以下 Tg）をはじめとした病原体の媒介により、固有種に影響を与えている。固有種の哺乳類では、Tg の感染による影響が明らかにされつつある一方、鳥類への影響は未解明である。本研究では奄美大島の野鳥を対象に、分子生物学的・病理組織学的手法で Tg の検出を試みた。死亡個体の脳組織から PCR 法により Tg の遺伝子の検出を行い、合わせて全身臓器の病理組織学的検査により感染の影響を調べた。検査の結果、アマミヤマシギ 2 個体で Tg の感染が確認された。感染個体では心臓に Tg が観察された一方、感染に伴う病的変化は見られず、健康に悪影響を及ぼしている証拠は得られなかった。

ポスター発表 P-16

100 回の採食記録に必要な調査努力量の推定：林床低木・草本の事例

○北村俊平（石川県立大学）

結実数が少ない林床低木や草本の有効な種子散布者はほとんどが未解明である。石川県内の低木や草本 12 種を対象とした自動撮影カメラ Acorn6210MC を利用した研究から、100 回の採食記録に必要な調査努力量（カメラ日、全撮影回数、有効撮影回数）について紹介する。100 回以上の採食記録が得られた 6 種で必要なカメラ日は 309 から 1755 日（100 回換算で 68 から 780 日）、全撮影回数は 1181 から 8928 回（100 回換算で 605 回から 9655 回）、有効撮影回数は 200 回であった。対象種によっては効率よく果実を利用する動物を解明することができた。しかし、撮影データ解析の効率化が大きな課題である。

ポスター発表 P-17*

ジョウビタキの高山進出の実態

○飯島大智（筑波大学）

ジョウビタキは日本で冬鳥とみなされていたが、2010 年以降に本州中部での繁殖が報告されている。これまで繁殖期の記録は、山麓や市街地に限定されていた。しかし、2016 年には乗鞍岳の高

山帯でジョウビタキが記録された。近縁種のクロジョウビタキは高山帯で繁殖することから、ジョウビタキが繁殖期に日本の高山帯を利用する可能性がある。本研究では、野外調査およびインターネットによる情報収集を実施し、高山帯におけるジョウビタキの繁殖期の分布状況を調べた。その結果、中部山岳域の3座の山岳の高山帯で繁殖期に記録が得られた。この成果は、ジョウビタキが日本の高山帯を繁殖期の生息地として利用していることを示している。

ポスター発表 P-18

神奈川県及び山梨県で標識をしたコブハクチョウ *Cygnus olor* の動向と今後の 個体管理

○加藤ゆき（神奈川県立生命の星・地球博物館）、葉山久世（かながわ野生動物サポートネットワーク）、篠田授樹（地域自然財産研究所）、菊池 博（横浜市立金沢動物園）

ユーラシア大陸に広く分布するコブハクチョウは、1900年代半ば以降、国内の飼育施設や湖沼等に愛玩用に導入された。近年は逸出個体が各地で観察され、繁殖も確認されている。国内の湖沼等で見られる大半は、飼育個体に由来する外来種である。神奈川県では1978年に初めて記録され、2021年に丹沢湖で営巣が確認された。山梨県ではこれまで山中湖と精進湖で繁殖が報告されていたが、2020年に河口湖での繁殖が確認された。翌年も繁殖し、同所での羽数増加の可能性が高くなったことから、丹沢湖と合わせて標識をつけ個体追跡を開始した。来春からは、山中湖村と調整のうえ山中湖に生息する約50羽に識別用の足輪の装着し、個体管理を進める予定である。

ポスター発表 P-19*

鳥たちの気象防災講座（磁気嵐編）

○太田佳似（日本気象予報士会）

これまで日本の迷鳥の多くは気象現象が影響していることを示して来ました。しかし、残る15%ほどは北米から渡来する迷鳥たちです。西から東に天気が進む偏西風域では、説明が難しい北米からの迷鳥でしたが、来年の太陽活動ピークを前に、迷鳥と磁気嵐との関係が見えて来ました。これまでの一般的な迷鳥の理論（逆方向への渡りや鏡像ルートへの渡り）にも、新たな解釈が与えられそうです。風と磁気嵐が織りなす自然の脅威の一端に触れ、今年の台風ハザードマップに続き、磁気嵐ハザードマップもご紹介します。最後に、渡りをする蝶類や人間への影響も含め、これからの磁気嵐に備えるべきお話もできればと思います。

ポスター発表 P-20

コヨシキリの帰還と換羽

○市原晨太郎（北大）、青木大輔（森林総研）、先崎理之（北大）

鳥類の帰還率は個体や生息地の質との関連が見られ、生態や環境の特性を理解する上で重要な指標であるが、これを知るには標識と再確認という労力のかかる調査が必要である。一方で、換羽の進行も同様に生息地の質と密接に関係する。換羽と帰還率の関係が分かれば、より簡易に得られる換羽データから帰還率や繁殖地の質を評価できる可能性があるが、直接調べた例はない。本報告では、北海道で繁殖するコヨシキリの繁殖地における帰還率と換羽状況について、試行段階の調査結果を紹介する。標識数が少なかったために帰還と換羽および生息地の質との関係は評価できなかったが、一部の標識個体の帰還と、繁殖地での換羽状況を把握できた。

ポスター発表 P-21*

エコロジカルトラップからスズメを守る～巣立ち率の悪い営巣環境とその条件に関する調査～

○岡村悠太郎（名城大院・農）、橋本啓史（名城大・農）

近年、スズメはレッドリストで絶滅危惧に相当するほど、個体数の減少が顕著である。減少の理由の一つにスズメの営巣環境の変化が考えられ、住宅構造の気密化により、民家への営巣ができず、人工物へ営巣する個体も確認されている。

本研究ではスズメの営巣地付近の環境について緑被データを用いて明らかにし、2024年の春季・夏季・秋季に実施したルートセンサス法による踏査の結果と共に解析した。また、スズメの人工物への巣を模擬した「模擬巣」を使った巣の内部温度の調査も行った。最終的な目標はエコロジカルトラップとなる条件を明らかにすることであるが、本発表ではスズメの営巣地の選好性や滞在地の選好性について検討した。

ポスター発表 P-22

市民科学調査の参加動機と野鳥への共感の関係

○大井琳太郎

野鳥研究において、市民科学は野鳥の生態、生息状況を明らかにする上でおいに貢献している。市民科学者の参加動機の心理尺度を用いた調査は世界では数々なされているのに対し、日本においては少ない。また、動物との好意的な関わりを促進する「共感」と参加動機との関係は明らかにされていない。市民科学の参加動機を明らかにする Citizen Science Motivation Scale と日本語版対人反応性尺度 IRI-J を用いて、大阪府における野鳥観察会及び冠島におけるバンディング調査参加者の参加動機と共感性、それらの関係を明らかにした。共感が1つのカテゴリーに縛られない広範な動機であることが明らかになった。

ポスター発表 P-23*

長崎半島沿岸の島嶼部で繁殖するウチヤマセンニュウの分布状況

○大槻恒介（長崎大・院・水環）、木村智美（長崎県野鳥の会）、峰隆一

ウチヤマセンニュウ (*Locustella pleskei*) は夏季に日本へ飛来し、島の低木林や草地を好んで繁殖する夏鳥である。本種は絶滅危惧種であるが、繁殖する島々についての詳細は十分に明らかにされていない。そこで、長崎県南部の島嶼において繁殖分布を調査した。調査はプレイバック法を用い、38 地点で実施した結果、7つの島で繁殖期の生息を確認し、そのうち1か所では繁殖が確実視された。生息地は主に無人島で、植生は低木林や草地が主体であった。今後は未調査地域での追加調査を進め、繁殖地の特徴を解明するとともに、分布の全体像を明らかにしていきたい。

ポスター発表 P-24

カワセミの嘴Ⅱ

○内田博

鳥類の嘴は口と手を併せ持つ機能がある。さらに嘴は二次性徴、性差などを表現していることもある。カワセミを、埼玉県で捕獲を行い、嘴についての形態の変化を調べた。カワセミの嘴は年齢、季節によって長さ、色彩が変化した。巣立ち後の幼鳥の嘴は黒く短いが、11月頃までに成鳥と同じ長さに伸長する。また性差を表す色彩は、雌の個体では巣立ち後2ヶ月程度で発現する。この時期には下嘴の赤色は暗いオレンジで、雄個体でも同様な発現をするが、雌では時期が進むにつれ赤色部分が増加する。成鳥でも嘴の長さは一年を通して変化があり、色彩も変化する。

ポスター発表 P-25*

亜種キュウシュウフクロウの尾脂腺の大きさについて

○安田晶子 (熊本県博物館ネットワークセンター・自然史資料を未来につなぐネットワーク九州)

尾脂腺は尾羽背側のつけ根に位置する分泌腺で、鳥類は嘴を用いて尾脂腺分泌物を羽毛に塗って羽繕いをする。この分泌物には、羽毛の物理的・化学的な保護、病気や外部寄生の予防効果が報告されており、尾脂腺の大きさは鳥種や性別、季節で異なると指摘されている。しかし、日本においてはその測定記録はほとんどない。そこで、仮剥製作製時に亜種キュウシュウフクロウの尾脂腺の測定した。その結果、体重が重い個体ほど尾脂腺も重い傾向がみられた。つまり、本種においては、体重から尾脂腺の重さが予測できる可能性が示唆された。また、性別ではオスが若干メスに比べて重い傾向がみられた。

ポスター発表 P-26

東京都における鳥類繁殖ランクの空間分布とその要因

○森田瑞 (滋賀大学データサイエンス学部)、田中勝也 (滋賀大学経済学部/環境総合研究センター 教授)

本研究は東京都における鳥類4種 (スズメ、ヤマガラ、オナガ、ハシブトガラス) の繁殖分布とその要因を分析した。1km メッシュデータを用いた Local G*分析と回帰分析を実施し、都市化に

適応する鳥類でも土地利用の多様性が重要であることが示された。また、ヤマガラは都心部においても繁殖可能なホットスポットが確認され、都市域における緑地の保全が森林性鳥類にとって重要であることが示唆された。都心部でも足立区、江戸川区、大田区など、水域を有していても土地利用が単調で、林地の乏しい地域ではどの鳥類においてもホットスポットが確認されなかった。

ポスター発表 P-27*

PIT タグを背側皮下に挿入したジャワアナツバメ巣内雛の巣立ちまでの成長観察：インドネシア中部カリマンタン州に位置するツバメビルコロニーを事例として

○太田貴大（大阪大学人間科学部）、Ahmad Muammar Kadafi（パランカラヤ大学理学部）、Adventus Robertino Rangin、Ardi Sandriya（パランカラヤ大学農学部）、Nabil Fariz Noorrahman（パランカラヤ大学農学部）、橋本啓史（名城大学農学部）

PIT タグを用いた鳥類の個体識別は、生態や行動を知るために有効な手法の一つである。鳥体内にタグを挿入する方法は、脱落や劣化の可能性が低く有望である一方、負の影響を与える可能性もある。本研究では、巣内雛の背側に PIT タグを挿入し、巣立ちまでの成長を観察した。対象種はジャワアナツバメとし、ツバメの巣採取専用ビル内で 10 巣 13 個体に PIT タグを挿入した。その結果、技術が未熟な段階で PIT タグを挿入した 4 個体が死亡した。巣立ちまで生存した 10 個体はタグの読み取りは可能で、タグの位置も移動しなかった。タグ挿入箇所の傷口は約 1 週間後には閉じていた。生存した 10 個体はすべて巣立ったと考えられる。

ポスター発表 P-28

ベランダコミュニケーション 2024

○小杉美樹

ベランダに来るヒヨドリとオナガの観察記録です。気づいたことなどをまとめています。今年はオナガとヒヨドリの関係性、ヒヨドリの空間認識について、オナガの繁殖地検討方法について記載しました。拙い内容ですがよろしければお立ち寄りください。

ポスター発表 P-29*

カルガモの換羽

○長久保定雄（バードリサーチ会員）

カルガモは雌雄同色同模様であり、他のカモのオスが持つような派手な生殖羽毛やエクリップスを示さず、年間を通じて一貫した外見を保つ。発表者は埼玉県朝霞市を流れる黒目川において、独自の個体識別法を用いてカルガモの行動と生態を観察してきた。その中で、成鳥カルガモの換羽

(換毛を含む)を連続的に観察し、換羽に関する基本的な情報を整理することができた。しかし、換羽形態は非常に複雑であり、さらなる詳細な考察には至っていない。本発表において、これまでの研究成果を皆様にご覧いただき、今後の整理方針についてご助言をいただければ幸いである。

ポスター発表 P-30

森林保護思想の変遷－森林は雨をもたらすか？－

○黒沢令子 (バードリサーチ)

森林は、鳥類を始めとして多様な生き物を育む存在である。しかし、一たび文明社会が林産資源や土地開発の対象として目を付けると、森林は世界中で見ると影もなく減少した。森林には多様な機能が認められており、水資源や土壌、さらには炭素の蓄積を通じて気候の安定化をもたらすともいわれる。さらに、森林があれば雨が降るという仮説も提唱されたが、その真偽を巡って主に北米で科学界・政界を巻き込む大論争が起きたことがある。こうした森林の機能について、人はいつ頃気づいたのか？そして、現存する森林はどのような思想の結果で残ったのだろうか？ここでは森林保護に寄与した西洋の思想史を探ってみる。

ポスター発表 P-31

イクメンマガモ (親子に付き添うマガモのオス)

○新田啓子 (日本オシドリの会)、中村眞樹子 (NPO法人札幌カラス研究会)

オシドリやマガモは一般にメスのみで抱卵育雛し、育雛期間中のメスはオスが近づくと物凄い勢いで追い払いますが、2024年札幌市中島公園において、マガモ親子に付き添っていたマガモのオスがありました。マガモやカルガモのオスが親子に付き添っていた事例は数例報告されていますが、育雛期間通して観察した報告はないので、報告します。

ポスター発表 P-32

陸鳥性が強い飛べない鳥の雨覆羽や風切羽には縞状の模様があらわれやすい

○鈴木理央

本発表では、飛べない鳥における翼(風切羽や雨覆羽)の縞模様の有無とその生態的背景について陸鳥性と水鳥性の違いに着目し、e-Birdをはじめとしたデータを活用して調べた結果を発表します。陸鳥性が強い飛べない鳥では雨覆羽や風切羽に縞模様が現れやすい一方で、水鳥性が強い飛べない鳥では縞模様がほとんど見られない傾向があることが調べていて明らかになりました。縞模様の形成要因について、どのような役割を持っているのか生態的役割や進化的背景の視点から考察をしてみます。

ドキュメント 60 日 ヨタカの砂浴び場の前で

○吉村正則

ヨタカの生態について不明なことが多いのは、夜行性であるために調査者の負担が多く、調査が進んでいないことが一因と考えられる。最近ではトレイルカメラの普及で、警戒心が強かったり、夜行性の動物等、目視では調査が不可能な生物の調査に用いられている。

しかし、ヨタカの砂浴びに関する単発的な報告はあるが、継続的な研究事項は国内外とも見当たらない。こうした事から香川県まんのう町で、トレイルカメラを設置してヨタカが砂浴びに来る時間、気象との関係等を調べた。このような記録の蓄積は、ヨタカの生態を把握するための重要な基礎資料となるため報告する。

ポスター発表 P-34

1990年代から2010年代にかけての東京都心部でのスズメの増加と郊外での減少

○植田睦之（バードリサーチ）、三上修（北海道教育大学教函館校）

東京都鳥類繁殖分布調査により1990年代から2010年代にかけてスズメが都心部で増加し、郊外で減少したことが明らかになった。スズメの採食地の緑地も同様の変化をしていたことより、土地利用の変化がその増減に影響していると考えられたが、2010年代の都心部の緑地面積は依然として郊外よりも狭く、緑地面積だけでは変化を説明できなかった。捕食者である猛禽類は都心部で少なく、これが影響している可能性も考えられた。繁殖成功率は都心部の方が低く、捕食者の少なさなどから都心部にスズメが集まったものの繁殖成功度が低い可能性もあり、より詳細な個体群動態の研究が必要である。

ポスター発表 P-35*

夜間フライトコール(NFC)録音に適したマイク指向性の検証と試作

○大坂英樹（トリルラボ）、櫻井佳明（加賀市鴨池観察館）、田米希久代（加賀市鴨池観察館）

渡り鳥の夜間フライトコール(NFC: Nocturnal Flight Call)の録音調査を2024年春から開始し、日本各地でデータ収集を進めている。本研究では、録音位置やマイク指向性の違いによるNFC検出数の差異を分析し、最適なマイク指向性を検証した。レーダーを用いた先行研究により、高度300mまでは高度に比例して飛翔数が増加することが確認されていることから、指向性の高いパラボラ型マイクが有利であることがわかった。さらに、実運用を見据えて耐候性と長期設置が可能なパラボラ内蔵箱型マイク(通称「パラ箱」)を試作し、SNR > 25 dBの優れた指向性を持つことを実証した。

樹木が枯れるとキツツキ類と樹洞に営巣する鳥が増えるモニ 1000 コアサイトの森

○高木憲太郎（バードリサーチ）、小川裕也（自然環境研究センター）

環境省の事業で実施されているモニタリングサイト 1000 陸生鳥類調査のコアサイトでは、毎年継続して樹木や徘徊性昆虫の調査が実施されている。同じ場所で複数の分類群について詳細な調査がされている強みを生かすことができないかと考え、毎木調査から得られる樹木枯死率（前年調査で生きていた木のうち、枯れた木の割合）の集計値を用い、鳥のデータとの比較を行った。鳥の個体数データを営巣形態ごとに集計し、樹木枯死率との関係を分析したところ、樹木枯死率が高い森ほど、鳥全個体数に占めるキツツキ類の割合が高く、樹洞に営巣する鳥の割合も高いことがわかった。

ポスター発表 P-37*

デジタル一眼レフカメラを鳥類の距離推定に利用する

○中津弘

範囲を限定したセンサスや地図記録など、野外では観察者と鳥類の間の距離を知りたい場合が少なくない。市販のレンズ交換式デジタル一眼レフと望遠レンズを利用して、撮影した鳥類の距離推定を試みたので報告する。5種の猛禽類の全長にそれぞれ対応したバーを貼り付けたプレートを異なる距離（50–650mの50m刻み）で撮影しておき（画質はJPEGの最大画素数）、画像をQGISで開き、PC環境上での”長さ”から実際の撮影距離を推定する回帰モデル（累乗モデル）を得た。撮影条件（撮影画素数、レンズ焦点距離、センサーサイズ）によって距離推定モデルは異なり、条件ごとに推定モデルを作る必要があるが、機構を理解すれば有効に利用できると思われる。

ポスター発表 P-38

参加型調査による鳥の採餌観察記録のデータベース化

○植村慎吾

鳥がどこで何を食べるかについては、神奈川県鳥類目録などで情報が蓄積されているものの、全国的にはまだまだ情報が不足しています。そこで、参加型調査として採餌情報を全国から1例ずつ収集し、食性データベースを作成しています。2022年に収集を開始し、これまでに約5300件、291種の記録を寄せていただいています。これまでの記録から明らかになってきた鳥の食性の季節変化や場所などによる違い、環境利用、これまで食性の研究が少なかった鳥種で多くの記録が集まっている例、世界中で多くの先行研究があるカワウで新しい食性が明らかになった例、論文で引用された例などを報告します。

ハヤブサの速度記録のシミュレーション

○大田黒俊夫

鳥の速度に関するギネス記録はハヤブサ(*Falco peregrinus*)を高度 5182m から急降下させて得られた 389km/h, その映像は YouTube でも見ることができる. しかし本当にこのような速度が可能なのだろうか? ハヤブサの急降下については多くの研究があるが, いずれも空気密度を一定と仮定した終端速度近似であり, 大高度差の降下に対しては実大気との乖離が大きすぎる. 本研究では高度差が 2000m を超えるような急降下を現実的な飛行環境のもとで再現した数値実験を行い, この記録が力学的に妥当なものか検証する. 時間が許せば鳥の高度記録についても紹介したい.

6. 広告

鳥類学大会 2024 へのご支援をいただいた企業・団体のご紹介

ティアック株式会社



TASCAM ティアック株式会社

調査目的で野鳥録音される方へ

タイマー録音機能を使用した製品モニター募集

ご協力内容
小型ICレコーダー『VR-04』に実装予定の新機能
タイマー録音を野鳥観察録音でご使用いただきます。

募集詳細、お申し込みはこちら

バードリサーチ鳥類学大会 2024 講演要旨集

発行：特定非営利活動法人 バードリサーチ

E-mail： br@bird-research.jp

URL： <http://www.bird-research.jp>
